

雨上がりに 見た幻

@blue_and_white

Unauthorized reproduction of this illustration,
reproduction on Danbooru or other websites,
or use in image AI generation is prohibited.

原案・イラスト

blew

執筆・脚本

アフリカの星逆



オアシスでの奇跡からしばらく後。

自分の中に燃える感情は、
争いを生む新たな火種でしかない。
そんな思いを抱えながらも
アビドスを守り続ける小鳥遊ホシノの前に、
大雨の気配と共にもう一人の後輩が現れる。

ユメから受け継いだものと、
先生から与えられたもの。
そして、彼々に託されたもの。

それらを受け取る資格に悩む彼女達は、
互いの思いを差し伸べ、突きつけ合う。
そして、二人が見上げた空に浮かぶのは――



セ ツ ト リ ス ト

P,05—17	Track1 : Don't Look Back In Anger.
P,18—48	Track2 : Wind／BACKLIT
P,49—60	Track3 : すべてがそこにありますように。／Sign
P,61—71	Track4 : 雨上がりに見た幻

P,72	アンコール
P,73—74	あとがき・奥付



「休日である今日の天気は、あいにくとキヴオトス全域で曇りのち雨。分厚い雲が広範囲に渡って広がり、例年に比べて異例の大雨になる地域もあるでしょう。皆さん、傘の準備をお忘れなく。続いては、ハイランダー鉄道学校による交通情報のコーナーです——」

薄暗い部屋。つけっぱなしにしていたテレビの電源を切り、囓っていた携帯食料の一片を口に放り込む。噛み砕いたそれをミネラルウォーターで流し込むと、制服姿の小島遊ホシノはベランダに続く窓から空を見上げながら、長い桃色の髪を一つにくくった。

乾いた砂漠が広がるアビドスでも珍しい、黒々とした暗雲。予報を見るまでもなく、ここにも直に雨が降るだろう。

「こういう時こそ、見回りしとかないとね」

誰に言うでもなく呟き、簡素な朝食を終えたホシノは、昨日の内に持ち帰っていたボディーマーを身につけた。

整備を終えた拳銃のチャンバーを確認してから胸のホルスターに収めると、壁に立てかけていたショットガンに箱から出したシェルを並べて差し込み、チャーキングハンドルのすべりを確かめて装填していく。

それは、彼女が一年生の頃から続けてきた儀式のような

ものだ。身に染みついた手順は淀むことなく、機械的に戦闘の準備を進めていく。

何度も、何度も繰り返してきた。二人の時も、一人の時も、三人の時も、五人の時も。自分の周りが変わろうと、ホシノが戦う為の備えを怠ったことはない。

（雨水が流れ込みそうなところは重点的に……あと、市街地も一応確認した方がいいかな。大雨の対策をしてない人がいたら、声くらいは掛けないと）

スマホの画面で地図を確認し、気になる地点にピンを立てていく。その範囲は一人で回るにはかなりの広さだったが、プランを立てるホシノの表情に不満の色は見られない。

どうせ、休日に一人でやることなど何もないのだ。そして、これは「彼女」からアビドスを託された自分が果たすべき責任でもある。

「お昼寝中、起こさないでねっと」

後輩達を確認するであろうモモトークのステータスを設定すると、枕元のシェルフに目を向ける。

そこにあるのは、過去と今を切り取った二枚の写真だ。

数週間前、ネフティスグループの契約書をきっかけにアビドス砂漠で起こった事件。あの日、ホシノは全てを守るために全てを喪いかけ、深く傷つき、結果として一つを手放すことで多くを受け継いだ。

そうして手元に残った大切な物が、そこには笑顔で立つ

ている。そして、その隣には手放した物の姿もあって。

「……行ってきます」

自分が託されたものと、守りたいものを再確認する。

それは、ホシノが銃を握る力をより強くすると同時に、背負った盾の重さが増すような、そんな錯覚を与えるものだった。

靴紐をしつかりと結んで玄関をくぐると、湿気が混じった重い空気が、鼻先に雨の気配を運んでくる。

「さて、やりますか」

目を遮られ、薄暗がりに沈む町並み。ひと気のない道を一人歩くホシノの頭上には、暗澹たる空が広がっていた。



巡回のスケジュールは、順調に消化できていた。

砂嵐で埋もれた水路の確認を一通り終え、ホシノは丘の上にある公園から街を見下ろす。手にしているのは昼食に持ってきていたゼリー飲料だ。

味気のないそれを飲みながら、異常が無いか市街地に目をこらす。細めた暁色と宵色の双眸に映るアビドスは相変わらず荒涼としており、復興にはまだ時間が必要なことを実感させた。

「変わらないな、ここは」

思わず漏れた声にあったのは、郷愁と悔恨。

この街は、かつて自分が多くの日々を過ごした思い出であるのと同時に、後輩達に残す遺産であり負債でもある。

できれば、自分にいつか訪れる卒業の日までに、少しでも彼女達の重荷にならないようできたらよいのだが。

「できることを、できるだけやらなくちゃね」

しかし、そんな希望的観測に自ら背を向けてしまうくらいには、小鳥遊ホシノという少女はどこまでもリアリストであり、悲観主義者なのだ。

「さて、休憩おーわりつと。次は市街地のほうを――」

今にも降り出しそうな雨雲の方角から、重苦しい風が吹いてくる。その中に紛れ込んだかすかな異物。

潰れたゼリーのパウチをゴミ箱に捨てたホシノが、弾かれたように振り返る。

「悲鳴……?」

彼女の耳には確かに聞こえた。ここから少し離れたところで、誰かの声が上がっている。

「っ」

それを認識した瞬間、公園の柵を踏み越えてホシノの小柄な体が宙を舞った。

（大まかな方角は把握したけど、場所は走りながら特定するしかないか。間に合うといいんだけど）

着地した民家の屋根が大きくきしむ。その家が廃墟であ



手にしていた傘を瓦礫の上に放り、ホシノもまた背負っていた盾を展開する。鋼鉄の障壁は歴戦の傷が無数に刻まれており……だがしかし、ついぞそれを打ち破った者がいないことをシロコはよく知っている。

「先生にもらったものの、そんなふうには手放していいの？」

「弾で穴開けるわけにもいかないからさ」

「そう。やっぱり、ホシノ先輩は分かっているんだね」

「……ルールは、昔と同じでいいかな」

「それでいい。何でもあり。降参するか、立てなくなった方が負け」

「シロコちゃん、降参したことあったっけ」

「ん、ない。今日もしない」

向かい合い、銃を向け合う。

高まる集中と、高ぶる神経。周囲の音が聞こえなくなるほどの一瞬。

「じゃあ、行こうか？」

濡れたコンクリートを、靴裏が噛む。

二人の間を、火花が散る。



巨大な壁のように、鋼鉄の盾が迫る。一瞬で視界を覆ったホシノの盾をヒールで蹴りつけ逸らしたシロコだが、そ

の時には散弾銃の銃口が至近距離で顔面に向けられていた。

「！」

火を噴く寸前のショットガン、その銃身に自分のライフルの銃身を交差させ、跳ね上げるように射線を逸らす。

直後、散弾が天井のトタンを吹き飛ばし、残骸が雨と共に落下。だが、両者はそれに目もくれず。盾と腕、それぞれにお互いを突き飛ばすよう力を込め、飛び退って距離を取る。

「まあ、分かっちゃいたけど。これくらいなら付いてくるか」

盾を握っていた手をひらひらと振り、ホシノが面倒そうにうそぶく。

そんな初撃をしのぎながらも、シロコは表情にこそ出さなかったが内心驚いていた。

この勝負自体には、敵意も害意もない。

純粋な手合わせとして、今の自分が小鳥遊ホシノという高い壁にどこまで届くのか。序列を確かめたいという狼の本能は、シロコの中にずっとあったものだ。

だが、それと同時に、ホシノが先生の気持ちをないがしろにするのを見かけたせいで、言いたいこともあって。

いずれ戦ってみたいという気持ちと、今一言物申さねば気が済まない気持ち。その二つが相まって、結果として焚



（使う？ いや、今じゃない）

「ぐう……！」

全身を殴りつける衝撃に奥歯を噛む。選んだのは、被弾前提の前進だった。

キヴォトスの生徒にとって、銃弾はよほど当たり所が悪くなければ軽傷で済む程度のもの。だが、それでも痛いものは痛い。特に、ホシノのように狙いどころを見定めた攻撃をしてくる場合は。

内臓に響く衝撃に涙がにじむ。

（それでも、散弾よりはマシ）

9ミリ程度のダメージなら許容範囲だ。もとより、暁のホルスに無傷で勝てるとは最初から思っていない。それよりも肝心なのは、あのショットガンを撃たせないこと。

そのためにも、シロコは前に出る。被弾を覚悟で間合いを詰めたことで、近接戦には持ち込めた。ここからイニシアチブを取り返さなければ、自分に勝機はない。

（って、考えてるんだらうね）

シロコが突き出したライフルのストックを半身になることで避け、横へ回り込むように一步を踏み出したホシノは、片腕で保持したショットガンを脇腹に突きつける。

しかし、シロコもそう容易く勝負を決めさせてはくれない。こちらの銃口が定まるより速く、頭上から斧のように振り下ろされた踵落としが寸前で踏みとどまったホシノの

前髪を揺らした。

シロコが履いているヒールの先が地面を割る。あれが自分の頭蓋骨だったらと思うとぞっとする威力だ。

本人の申告通り、ホシノがよく知るシロコとは違う。特にフィジカルの強さと冷静さは急激な成長を見せている。（そんな成長をしなきゃいけないほどのことが、君にはあったんだよね）

キヴォトスに訪れた危機の中、アトラ・ハシースの箱舟で初めて会った時。敵として立ちはだかったシロコの眼差しは、ユメを喪った自分と同じものだった。

このシロコの過去を、ホシノは断片的にしか知らない。だが、それでも分かることがある。

彼女もまた、胸が張り裂けそうなほどの孤独を、誰にも分かち合えないと思ってしまうほどの苦しみを、ずっと直視してきたのだろう。

左手で突き出された拳銃。その手首を、ホシノもまた拳銃を握る左腕で打ち据える。

シロコの銃口が吼えるが、弾丸は逸らされ明後日の方向へ。ホシノの銃口がシロコの眉間を捉える寸前、飛び退り片手で突きつけられるのはアサルトライフル。ホシノが放った銃弾は切っ先を右へ弾かれ、シロコの耳元を素通りする。

ライフルのセレクターがフルオートに切り替えられた。

それを音だけで察知したホシノは、鋭い回し蹴りでライフルを弾くと同時、拳銃をホルスターに戻しショットガンで照準。しかし、それを読んでいたシロコはホシノを抑え込もうとさらに距離を詰める。

「やるねえシロコちゃん。そんなにあの傘が欲しいなら、おじさんから先生に伝えとくけど？」

ハンドガード同士が衝突し、まるで錨迫り合いのように交差する。レシーバーが軋むほどの押し合いをしながら軽口を叩いてみるが、シロコの目に変化はない。そこには、何かを伝えようとする意志と、勝負を続けるという戦意だけが輝いていて。

その光を前に、ホシノは改めて思う。この子はやっぱり「シロコちゃん」なんだ。一度決めたことは絶対譲らない。だったら、彼女に言うことを聞かせる方法の一つだけ。

「分かった。じゃあ続けよっか」

諦めたように嘆息したホシノの左手が、相手のライフルに伸びる。掴んだのは差し込まれていた弾倉。シロコもそれに気づき、渾身の力でホシノを突き飛ばすが、マガジンキャッチを押し込まれた銃からは容易に銃弾が奪い取られてしまう。

これで、シロコのライフルが撃てるのは薬室にある一発のみ。そして、手の中にあるマガジンを投げ捨てる暁のホルスは、リロードの隙など与えない。

「やってくれる……！」

シロコもそれを分かっているのだろう。彼女は早々に見切りを付けたライフルをスリングで肩に掛けると、両手でハンドガンを構え直した。

そこへ、暁色と宵色の双眸が猛禽のように襲い掛かる。数度の交錯。拳銃による抵抗を塗り潰すかのような散弾の轟音が響くさまは、一方的な蹂躪にも近い。

その渦のさなかにいて、ホシノは思案する。

シロコは、いったいどうしてこんな勝負を挑んできたのだろう。

（傘を奪うなんて、本当はそんなつもりなくせに）

共有したのは短い時間だが、それでもこのシロコが先生のことを慕っているのはホシノにも分かる。自分の世界では守ることができなかった彼を、今度こそ不幸な目に遭わせたくない一心なのだろう。

先生の意志を汲むことができない彼女ではないはず。だとしたら何故。

全身を叩く雨が煩わしい。

（なんで、君はそんなになってまで）

避けきれずに掠めた散弾が、黒いドレスに痕を残している。

痛みに歯を食いしる彼女は、この勝負に何を得ようとしているのか。



——大丈夫だよ。ちゃんと君は変わってる。

——この苦しみも、幸せも、私の人生にとってどれも大切なもの。

先生の言葉。オアシスで語り合ったホシノの言葉。そして、あの日の花束。

「……そっか。同じなんだ」

先生が、ホシノを守りたいと思っていることも。

ホシノが、シロコを見過ごせないことも。

シロコが、ホシノに向き合わせたかったことも。

そして、“彼”が、シロコに伝えたかったことも。

譲れなくて当たり前だ。自分達は、ずっとお互いを理由に手を伸ばし合っていたのだから。

「君は、あのシロコちゃんと自分が同じ場所にいるのはよくないって何度も言ってたけど。そうだとすると、やっぱり君と一緒にいたいんだよ。もちろん、それは私も含めてね」

皆と一緒にいたい。素直にそう口にできたら、どれだけよいだろう。

もう一度、この世界でやり直すことができるなら。その機会を、“彼”が与えてくれたのだとしたら。

最後に課された宿題の答えは、きっとそこにある気がした。

「それに、おじさんにはやっぱり責任があるからさ」

「責任？」

「君にマフラーを巻いてあげたのは、間違いない小鳥遊ホシノだから。それは、世界が違って変わらない。なら、手を差し伸べた者として、おじさんはシロコちゃんが幸せになるまでを見届けなくちゃ」

そう言うホシノの表情は、かつて自分が追いかけていた先輩の姿そのもので。

「……そういうことなら、私にも責任がある」

「うん？」

「ホシノ先輩を、この世界では助けられた。なら、私だってホシノ先輩が幸せになるまでを見届けなきゃ」

その言葉に呆気にとられたホシノは、しばらくシロコの慈しむような目を見つめ返し、やがて「うへへ」と嬉しそうに笑った。

「送るよ、ホシノ先輩」

「えー、そこは一緒に帰ろうじゃないの？」

「ん……それは、また今度」

「あれま。いい流れだと思ったのに。警戒心が強かったシロコちゃんのちっちゃい頃を思い出すねえ」

「そういうわけじゃ……また顔は出すから」

「分かっている、時間が必要なんだよね。でも、願わくばおじさんが卒業するまでには決心してくれたら嬉しいな」

「……善処する」

